

韓国における『古事記』研究（六）

—二〇一四～二〇一五年の学術論文を中心に—

田 中 千 晶

韓国における『古事記』の専門的な研究は近代から始められ、特に一九八〇年代以降は本格的に研究が進展し、近年では年間十数本の研究論文が発表されている。『古事記』に関心を寄せる理由として、韓国に関連した記述の存在、神話の類似性などが指摘されている⁽¹⁾。

本稿では、近現代における『古事記』の受容研究の一環として、韓国ではどのように『古事記』が研究されているのか、また用いられているのかについて明らかにしていくため、近年の学術論文を紹介する。今回紹介する二〇一四～二〇一五年の特徴としては、日本の神話と韓国の説話を比較考察する論、日本の近世から近代における思想に関する論考の増加である。

二〇〇〇年までの研究動向⁽²⁾及び、二〇〇〇年～二〇一三年における研究論文リストに関しては、拙稿⁽³⁾を参照されたい。



研究年表（二〇一四～二〇一五年）

論文の検索については、R I S S (Research Information Service System)⁽⁴⁾を基本とし、補助的にK S I学術論文情報⁽⁵⁾とD Bpia⁽⁶⁾を用いた。R I S Sで検索対象を韓国内学術誌の論文とし、キーワード「古事記」で検索すると、二七七件がヒットした⁽⁷⁾。このうち本稿では、二〇一四年～二〇一五年の二年間について紹介する。この期間では韓国内で三十七件の学術論文が刊行されたが、題目や本文内に加え、論文のキーワードとして登録されている「古事記」も検索されるため、論文の主旨が『古事記』に限らないものも含まれている（研究年表の14、23等）。しかし『古事記』が各方面の研究分野からどのように用いられているかを知るためにも、件数に含めることとする。すべての研究論文の内容を紹介することは困難であるため、発行年順に題目等を記した研究年表を挙げ、一部の論文について要旨を掲載した⁽⁹⁾。二〇一六年以降の論文に関しては、後の機会に譲ることとする。

※番号に□を付した論文は後に要旨を記載する。

	題目	著者	学術誌名、巻号	発行所	発行年
①	日本文学に現れた季節表現の由来―“春秋優劣競争”素材を中心に―	崔在喆	日語日文学研究88―2	韓国日語日文学会	二〇一四・二
2	上代神名の借音表記	崔建植	東北亜文化研究39	東北アジア文化学会	二〇一四・三
③	古代日本の文字文化展開と韓国系移住民に関する研究	李昌秀	アジア太平洋研究21―1	慶熙大学校国際地域研究院	二〇一四・三
4	日本的靈性論と国学の生命観	裴寛紋	東アジア古代学33	東アジア古代学会	二〇一四・三

32	日本上代文献神話に現れた「禊」伝承および「海」に関する研究について	朴信映	日本文学論集32	慶熙大学大学院日本文学科	二〇一五・九
31	日本神話に現れた「死」と「再生」—神話解釈史の視点から—	斎藤英喜	日本学研究46	檀国大学校日本研究所	二〇一五・九
30	テキストがあらしめた「古代」・「歴史」・「歌」	神野志隆光	漢学漢文研究10	高麗大学校漢学漢文研究所	二〇一五・八
29	上代日本語の蟹借字表記に対する考察	河素偵	日本学報104	韓国日本学会	二〇一五・八
28	古事記における自殺をめぐる一考察	朴美京	日本語文化31	韓国日本語文化学会	二〇一五・六
27	「須須保理菫」に関する一考	李知洙	日本研究64	韓国外国語大学校 外國學綜合研究センター 日本研究所	二〇一五・六
26	芋環型蛇婿入譚の祖母嶽伝説と韓国—鉄文化の視点から—	金贊會	日本近代学研究48	韓国日本近代学学会	二〇一五・六
25	イザナキとイザナミの海神的性格についての考察—「古事記」及び「日本書紀」を中心に—	朴信映	日語日文学研究93—2	韓国日語日文学会	二〇一五・五
24	玉を通じてみた日本神話—「古事記」「日本書紀」神代の流れより—	朴美京	日本学研究45	檀国大学校日本研究所	二〇一五・五
23	日本の焼酎名	許晃會	日本近代学研究47	韓国日本近代学学会	二〇一五・三
22	意祁と袁祁二王子の物語考—「古事記」を中心に—	崔元載	日本語文学68	日本語文学学会	二〇一五・二
21	『古事記』に見える希望表現に関する考察—「日本書紀」の同一記事との対照を通じて—	李真淵	日語日文学65	大韓日語日文学会	二〇一五・二
20	上代神名の称詞(一)—金子武雄の第一類を中心に—	崔建植	日本研究38	中央大学校日本研究所	二〇一五・二
19	航路変化で見た高句麗と倭の五王	金インホン	史学志49	檀国史学会	二〇一四・十二
18	日本上代文献神話に現れた玉の象徴性考察—考古学的遺物との相関性を中心に—	朴美京	日語日文学研究91—2	韓国日語日文学会	二〇一四・十一
17	『古事記』『日本書紀』に現れた「樹木」—神代伝承を中心に—	金美善	日語日文学研究91—2	韓国日語日文学会	二〇一四・十一
16	日本神話が韓国社会に及ぼした影響—慶北高麗と『記紀』の出会いを中心に—	魯成煥	日本語文化28	韓国日本語文化学会	二〇一四・十
15	古事記の構想	金祥圭	東北アジア文化学会国際学術大会発表資料集2014—10	東北アジア文化学会	二〇一四・十
14	近世前期日本の戦争英雄上の創出と変容の思想的背景研究—市民作家西鶴のナラティブを中心に—	鄭濬	日本学研究43	檀国大学校日本研究所	二〇一四・九
13	日帝末期同根同祖論の台頭と内鮮一体論の亀裂	張信	人文科学54	成均館大学校人文科学研究研究所	二〇一四・八
12	日本上代文献神話に現れた「海」のイメージ—「古事記」上巻および「日本書紀」神代巻を中心に—	朴信映	日語日文学研究90—2	韓国日語日文学会	二〇一四・八
11	中世のヒルコ伝承—「神道集」を中心に—	金英珠	日語日文学研究90—2	韓国日語日文学会	二〇一四・八
10	韓国と日本の死体転生神話研究—「ノイルチエデギルの娘」と「オオケツヒメノカミ」を中心に—	文範斗	朝鮮語54	朝鮮語学会	二〇一四・六
9	記紀万葉の麻韻2等字借字表記について—古代韓国漢字音との関連の可能性を中心に—	李京哲	比較日本学30	漢陽大学校日本学国際比較研究所	二〇一四・六
8	『古事記』須佐之男命の神格再考—コンテクストを中心に—	河素偵	東アジア古代学34	東アジア古代学学会	二〇一四・六
7	日本ナシヨナリズムの根源と近代時期の国家主義的変容—記紀と武士道を中心に—	朴美京	東アジア古代学34	東アジア古代学学会	二〇一四・五
6	『古事記』にあらわれた黄泉国	李仁和	日本学報99	韓国日本学会	二〇一四・五
5	「クロントンドン神仙美」と「アメノワカヒコ弔詩」の親縁性に関する比較文学的な考察	朴正義	民族文化研究63	高麗大学校民族文化研究院	二〇一四・五

33	『古事記』に現れたオオクニヌシ神像	関内勳	日本語文学66	韓国日本語学会	二〇一五・九
34	上代神名の称詞(Ⅱ)―金子武雄の第二類・第三類を中心に	崔建植	比較日本学34	漢陽大学校日本学国際比較研究所	二〇一五・九
35	「人文学」と「日本研究」と「和」の思想	鎌田東二	日本研究16	釜山大学校日本研究所	二〇一五・十一
36	『古事記』、『日本書紀』に現れた老人像	趙幼美	日語日文学研究95―2	韓国日語日文学会	二〇一五・十一
37	武内宿禰伝承の形成と大臣制	李在碩	漢城史学30	漢城史学会	二〇一五

論文要旨(年表より抜粋)

①崔在喆「日本文学に現れた季節表現の由来―“春秋優劣競争”素材を中心に―」

(『日語日文学研究』88―2、韓国日語日文学会、二〇一四年二月)

日本文学の中の季節表現の由来を『古事記』と『万葉集』から考察した論。『古事記』上巻の序文に、「秋津嶋」と「秋」が使われ、神々の名前、地名などに「秋」が多用され、導入の順序も先んじているのは、農耕民族として収穫の季節である秋が重要だとの認識からだろう。『古事記』中巻の「春・秋の兄弟」の「求婚争いの物語」では、兄弟の名前に「春山之霞」と「秋山下水」などの季節語を用い、兄弟に求婚を競わせることで、「春秋優劣論」に火をつけた格好である。これは、以降『万葉集』、『古今和歌集』、『源氏物語』、『新古今和歌集』などに脈々と受け継がれる、いわゆる「春秋争い」の始まりだといえる。『万葉集』巻八と巻十は、春・夏・秋・冬の四季別で「雑歌」「相聞」などに分類して編集されている。これは『古今和歌集』以降の四季別の編集体制のモデルになったと考えられる。『万葉集』巻一の「雑歌」の巻頭歌は春の野原で、作者である雄略天皇が山菜を摘む乙女に求婚する歌であり、同巻十六番の歌は額田王が春秋の優劣を判別した歌である。この十六番の歌については、詳細に論述している。古代の日本人は、春の梅が好きで、夏にはホトトギスの鳴き声を好んで聴き、秋には萩の花と鹿、紅葉を楽しみ、特に秋を好んだ。一方で「春秋優劣」の比較では、『古事記』の春秋の兄弟の争いで弟の春霞の方が勝者となり、『万葉集』では、秋の紅葉を好んだ点が異なっている。そして『万葉集』の秋の表現は、以降の『古今和歌集』の雰囲気とは異なっている。日本文学の季節表現の由来は、中国の古典の影響のもとで出発して以来、古代文学

でいち早く季節別による詩歌の分類と「春秋優劣」を競うなどの特徴を持つっており、多様に展開されてきた、と結論づけた。

③李昌秀「古代日本の文字文化展開と韓国系移住民に関する研究」(『アジア太平洋研究』21―1、慶熙大学校国際地域研究院、二〇一四年三月)

古代日本における漢字文化の流入過程を時期的に区分し、発掘された文字と上代文献に現れた日本の知識水準と、その作業に直接的に加担したと見られる韓国系移住民の活躍像を導き出した。まず発掘文字に現れた日本の文字文化は、中国または韓半島を中心に東アジア文明圏下に展開した文字の疎通過程で使用されたものと考えられ、日本列島の国家や社会の成熟と関係なく、外部にあった特殊記号として国際関係という限定された場で利用されたことが分かる。また、出土史料と文献上で見る時、文字が地方にまで通用し、それにもなう文字文化が本格的に展開した時期は七世紀後半以後ということが出来る。そして日本列島各地に短期間に急速に普及した文字文化は東アジア先進文明と渾然一体になって全国的に受容されたことが特徴である。これは古代日本社会での韓国系移住民の活躍が、単純に実務的な機能に留まらず中央と地方での学問とそれを土台にした文字文化と精神世界形成に大きな影響を及ぼしたことを物語る。したがって上代文献の成立には文字の導入以後、高度な文字活用能力と知識、そして文章力を持った韓国系移住民の活躍がその背景にあるということを見逃してはならない。

⑥朴正義「『古事記』にあらわれた黄泉国」(『日本学報』99、韓国日本学会、二〇一四年五月)

『古事記』の黄泉国は、古代中国の知識が加味された「黄泉」(「死の世界」とい

う前提で、「死の世界」として描かれてきた。しかし『古事記』の黄泉国は単に伊邪那美が死んで行く世界であるだけで、人間が死んで行く「死の世界」を語らなかつた。結果的に、『古事記』テキストから遠ざかった黄泉国に過ぎない。『古事記』創世神話は、葦原中国が他界との関係とともに作り出す過程を語るもので、このような流れで黄泉国も見なくてはならない。黄泉国のイメージである「暗い」「罪と禍」とは『古事記』テキストでは見られない。そこにあるのは単に「穢」の世界だけだ。黄泉国の「穢」とは最初から存在する黄泉国の性格であり、黄泉国は「穢」の世界として葦原中国との関係に存在している。「国稚」で始まった「国」が「穢」の世界である黄泉国と遮断されて葦原中国という名称で具体的に現れ、黄泉国の「穢」を「禊祓」で無くして清浄の国になり、将来に天皇が統治する理想的世界としての国に発展する。これを成しとげたイザナキは「伊邪那岐命」から「伊邪那岐大御神」になって『古事記』で痕跡をなくす。黄泉国の主題は「死」ではなくて「穢」であり、葦原中国を現わす世界として、黄泉国は『古事記』にある。

⑧朴美京「『古事記』須佐之男命の神格再考—コンテクストを中心に」(『東アジア古代学』34、東アジア古代学会、二〇一四年六月)

近年の〈読み〉研究の観点からコンテクスト連結上不自然だという理由でスサノオとは別個の独立した神話と見なされてきた〈五穀起源神話〉も含め、その実体糾明を取り巻く数多くの論議があつたスサノオの神格に対する再検討を試みたもの。既存の研究が、『古事記』の文脈を無視して彼が活躍する舞台を中心に機械的図式的に把握してきたことに対する限界を指摘すると同時に、その間見過ごされてきた『古事記』の「善」「悪」の概念に対して考察した。その結果、『古事記』の「善」「悪」は高天原側の価値観に基づいて決定されていて、結果的に高天原側のためのものが「善」であり、そうではないのは「悪」と見なされていることを確認することによって、〈五穀起源神話〉を含んだ『古事記』のスサノオの神格を『古事記』外の善悪の論理では把握できないということを示した。さらに、『古事記』のスサノオは彼が活躍する空間とは関係がなく一貫して〈強大なエネルギーを持つている神〉であることに間違いはないが、すでに〈五穀起源神話〉を境界にその

エネルギーの発現の姿に変化があることを指摘した。すなわちアマテラスをはじめとする高天原の神々に〈ハラエ〉という祓除儀式を行ったスサノオは〈五穀起源神話〉を開始以後、彼が持っている強力なエネルギーを積極的に高天原側のためにだけ使うことになる。『古事記』のスサノオの存在意義とその編纂意図(目的)はまさにここにあるだろう、と論じた。

⑨朴信映「日本上代文献神話に現れた“海”のイメージ—『古事記』上巻および『日本書紀』神代巻を中心に—」(『日語日文学研究』90—2、韓国日語日文学会、二〇一四年八月)

『古事記』と『日本書紀』の神話は天照大神の存在と天孫降臨等のモチーフからみて、表面的には天上の世界、即ち高天原を想起させる。それにも関わらず、『古事記』と『日本書紀』の神話の初頭で主に描写している世界の形は、海を思い浮かべせるものである。また、所々に海と関係のある、または海を背景にした様々な伝承が登場する。『古事記』と『日本書紀』の海と関連した伝承を調べた結果、両文献とも表面的には天神観が強いが、そのベースには海と関連が深い伝承が数多く存在した。特に、そのイメージの変化は海を持つ生成のイメージから始まる。以後、天と対立するイメージを経て、天に力を合わせ結合するイメージに変化する。海が天に力を合わせる形で描かれている伝承は、『古事記』と『日本書紀』で殆んど類似した形で描かれている「山幸と海幸」の伝承である。「山幸と海幸」の伝承は『古事記』と『日本書紀』の本文及び一書でほとんど類似した形で描写されているが、これは『古事記』と『日本書紀』の神話が互いに一致しない場合が多いという点を考えてみれば、かなり強い意義をもって挿入されたと思われる。その内容を精査してみると天と海の対立というより、天がすることに海が力を合わせるという構造がよく現れている。これは『古事記』と『日本書紀』が共通的に描こうとした海のイメージであろう。

⑩魯成煥「日本神話が韓国社会に及ぼした影響—慶北高麗と『記紀』の出会いを中心に—」(『日本言語文化』28、韓国日本言語文化学会、二〇一四年十月)

高麗の高天原祭について書かれた論文である。高麗は日本植民地時代に任那日本府と仮定され、いくつかの記念碑が日本によって建てられた。伽耶王朝の華麗な文化の子孫として、それは高麗人の屈辱的な出来事であった。彼らの誇りを回復するために、彼らは攻撃の理論に日本の神話を利用した。その理論によれば、高天原の所在は高麗であり、日本の皇室は高麗の子孫である。理論化と儀式化によって、彼らは高麗を国家の誇りとして宣伝したがっている。これらの運動の努力で、高天原は伽耶大学に建設され、毎年春に高天原祭を開催している。高天原祭の間に韓日共同の会議を開いている。このため、高天原祭は、高麗人の新たな伝統である。また、高麗が日本の神話と高麗地域とのつながりを絶えず言及していることから、その神話の一部が地域社会に定着した。しかし、高天原論についての彼らの記述は、ほとんど客観性がない。高天原運動は、一人の主導による傾向がある。これが、この動きがどのように変化するかを予測することができない理由である。したがって、我々はその変化を注意深く観察する必要がある。以上のように警鐘を鳴らす論である。

㉑金美善「『古事記』『日本書紀』に現れた「樹木——神代伝承を中心に」(『日語日文学研究』91—2、韓国日語日文学会、二〇一四年十一月)

『古事記』と『日本書紀』の神代の伝承に現れている「木(樹・木)」のモチーフは、天上世界・地上世界・地下世界をつなぐ「疎通」や「移動」の媒介物として、そしてあるいは神たちの避難先、あるいは神々が派遣する使者の神聖な初降臨地として描かれている。また「木」は、木そのままの姿で伝承に書かれている場合もあるが、柱や千木のような木材の変形形態としても書かれ、天上・地上・地下というそれぞれ違う世界への疎通や移動の觀念の産物としても描かれている。それは、国土の三分の二が森林で、その森林と歴史を共にしてきた人々であるからこそイメージ化できる觀念ではないか。また、上田正昭によると「日本の神觀念の特徴の一つとして去来性と遊行性が挙げられるが、日本の神は、常住不変の性格を持っているのではなく、いつも移動して崇拜されながら成長する」という。その時、神たちが移動通路のために頼る所が「木」であり、あるいはその「木」は神たちが鎮座する

神木にもなる。このような「木」が、『古事記』と『日本書紀』の神代伝承では天上・地上・地下という空間の中で神の疎通や移動のための觀念の産物としてイメージ化され、古代日本人たちにとって畏敬や崇拜の象徴的な存在となっている。

㉒朴美京「日本上代文献神話に現れた玉の象徴性考察——考古学的遺物との相関性を中心に——」(『日語日文学研究』91—2、韓国日語日文学会、二〇一四年十一月)

日本神話の玉と日本の遺跡出土の玉との関わりについて考察した論。まず、神話の玉に関する字の字典的な分析と、タマに関する辞書的な分析をした。その上で、神話に現れた玉を示す用語を抽出し、その形に関する考古学的名称をとらえた。そして、考古学での遺物としての意味に基づき、神話上の玉の持つ象徴性を二つに分類した。ひとつは、装飾的意味の玉として、イザナキがアマテラスに譲る首飾りの「御頸珠」が挙げられる。これを装飾する目的は稜威を象徴するためである。玉の持つ霊的な能力によって、首長としての権力が保てる。このような古代の様相は、古墳出土の玉とその考古学的な見解を通じて認められている。また、スサノオとアマテラスの「誓約」段にも「曲玉」という形で玉の霊力が現れている。もうひとつ、祭祀の意味の玉は、「天岩屋戸」のアマテラスを招魂する儀式ともする神話の中で、祭祀的な道具としてよく描かれている。日本の遺跡の中では、玉が発見された祭祀の跡を、四・五世紀の祭祀遺跡として認めている。この考古学的見解とともに、神話に現れた祭祀玉の様相を多角的に見た。古代人にとって玉は、その稀な物質的価値までも、首長たるものの持つ貴重な装飾品として認められた。その質によって異なる神秘的な光までも、霊的な力が発揮されると信じられた理由のひとつである。それで、稜威を表すためにも、死んだ後の靈魂を守るためにも、遺体に飾られた。それゆえ、神を祭る祭式には、無くてはならない必須的な祭儀道具になったのである。以上のように、文献神話の記録と、考古学的成果である遺物とのかかわりあいを中心に、タマの持つ象徴性を考察した。

㉓崔元載「意祁と袁祁二王子の物語考——『古事記』を中心に——」(『日本語文学』68、日本語文学会、二〇一五年二月)

『古事記』におけるオケ・ヲケ二王子の物語の作品的特異性を考察した。まず、二王子の流離と苦難の物語は、王位継承争いを示すものである。一見、そこからは政治的背景が窺われないが、前後の物語や系譜的記事を合わせ考えると、まぎれもない王位継承争いの物語であることがわかる。二つ目に、清寧記における名告りの詞章は、履中天皇という偉大な統治者を先頭において系譜を一々唱えていくことで、様式化された権威的な表現として機能していたと思われる。それは二王子が新たな王としての資格を持つ正当な王位継承者であることを保証するものであると考えられる。三つ目に、『古事記』下巻は、はっきりとした思想的な立場が貫かれていることが窺われる。それは、仁徳の王統を継ぐ履中系は、有徳の君主として好意的に描かれるのに対して、允恭系は、不義、残虐さなどといった悪いイメージで描かれている。四つ目に、『古事記』でのイヒトヨの位相は、オケ・ヲケ二王子の即位実現のためのものであり、それはまさに履中系の保証のために機能していると考えられる。『古事記』のオケ・ヲケ二王子の物語は、有徳の天皇としての資質を兼備した履中系の復活の物語として位置づけられるのではないかと論じた。

〔8〕朴美京「古事記における自殺をめぐる一考察」(『日本語文化』31、韓国日本言語文化学会、二〇一五年六月)

従来の研究が見過ごしてきた自殺に注目し、とりわけ『古事記』における自殺を中心に『日本書紀』の記述内容や表現方式とも比較・対照を加えながら『古事記』に現れた自殺のあり方を分析すると同時に、これらの自殺を通して『古事記』は何を語ろうとしているのかを検討したものである。『古事記』に現れた自殺の事例はそれほど多くはなかったが、これらの自殺の裏には共通して王権の論理という政治的イデオロギーによって強いられられた面があることを明らかにした。結局、『古事記』は既存の伝承を王権の論理に合わせて『古事記』における自殺を美化し、あるべき理想像として提示することによって積極的に王権の論理を貫こうとした作品としての一面をもっていると言えよう。本研究は『古事記』における自殺の意味をみきわめることで、テキストの本質に近づこうとした試みである。これまで見落とされてきた自殺に着眼し、主にテキストに基づいて『古事記』という作品を読みなおした

ところに意義があるといえよう。

〔9〕関丙勳「古事記」に現れたオオクニヌシ神像」(『日本語文学』66、韓国日本語文学会、二〇一五年九月)

大國主神の神話には、絶対弱者だった者が試練を通じて、窮極的には支配者に生まれ変わる過程が生々しく描き出されている。実に多様な素材を採用して構築しており、一人の人物を主人公とする完全な形の物語を形成していることができる。生まれる場面が記されていない点は、神話の主要神である天照大御神や須佐之男、火遠理とは異なるが、少年から大人への通過儀礼を想像させる、八上姫への求婚譚から、八十神による迫害と逃走、根の国における須佐之男による試練と克服、そして出雲への帰還と支配へと続く話の構造は、物語文学の先駆としても遜色のないものといえよう。神話のはじめには、大國主がどのような血筋であれ、権座を占めるのは不可能な立場にすることが強調されている。しかし、彼を従者として連れ出す兄弟たちの性情を悪辣窮まりない者に描き、呼称においても、一人一人に特定の名を与えず、ただ多数を表す「八十神」と、引つ括めて登場させ、その地位を推されるような言及がないのは、他の神話と全く異なる点である。このような構造からは、結局、迫害される者の品格が迫害する者とは正反対であることを強調し、試練の克服を通じて権力者に生まれ変わる一連の過程を穏当なものにするための作意をそこに見出すことができる。また、大國主は最初から最後まで女性に支えられていると言っても過言ではない。八十神による二回にわたる惨殺から蘇生し、偉大な神の力を手にいれる過程には、母親と女性の助けが不可欠なものになっている。しかも、大國主の死と再生と成長には、男女の性的交渉を思わせる原色的な描写が多々確認される。一見、猥褻ともとれるような内容だが、実は、これは絶えずに大國主に再生力と新しい力を吹き込むための方便と考えられる。性的交渉に象徴される復活が暗示されているのである。

〔10〕趙幼美「古事記」、『日本書紀』に現れた老人像」(『日語日文学研究』95—2、韓国日語日文学会、二〇一五年十一月)

古代日本において老人はどのような存在であったのかを『古事記』と『日本書紀』を分析対象として調査した。『古事記』と『日本書紀』の記事の中では、老人として登場する人物を示す漢字として主に「老」と「耆」を使っていたが、その人物がどのように描かれているのか、そこに焦点を合わせて考察を行った。そこで得られた特徴を、時間の経過と合わせ次のように四つに分けて再構成した。第一に、土着勢力の象徴として出現する人物であり、時期的には神代から第二十三代顕宗天皇の時期までである。第二は、天皇家の支配理念に役目を果たす人物であり、顕宗天皇紀にのみ出現している。その後の記事には特定人物の記述は見当たらず、「国のすべての老人」と一般化された非特定多数の老人の記事が多かったため、これらを合わせて第三の特徴として区別した。このような社会的位置変動は、天武・持統天皇時期に至って新たな認識が定着し始めた。天武・持統天皇紀に多く記述されている、保護の対象としての老人を第四の特徴とした。老人に対して国家的に物質的援助を始めた認識は、律令が制定され、制度的に定着していった。律令の制作には、外国の制度を参考にしているため、この時期、老人への国家的援助が行われ始めたのは外国での支配イデオロギーの反映だといえる。つまり、老人に対して保護の対象及び奉養の対象と法的に指定したのは、天皇家によって追加された理念であり、七世紀以前と以後を分けて理解しなければならない、と結論づけた。

注

- (1) 魯成煥「神話学から見た韓国の記紀研究」(『國文學 解釈と教材の研究』51—1 學燈社 二〇〇六年一月)
- (2) 研究動向に関しては注(1)及び、金祥圭「韓国における日本神話研究の現状」(『古事記年報』46 古事記学会 二〇〇四年一月)を参照した。
- (3) 田中千晶「韓国における『古事記』研究(一)——二〇〇〇—二〇〇二年の学術論文を中心に」(『水門』25 勉誠出版 二〇一三年一〇月)、同「韓国における『古事記』研究(二)——二〇〇三—二〇〇六年の学術論文を中心に」(『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』50 二〇一四年三月)、同「韓国における『古事記』研究(三)——二〇〇七—二〇〇九年の学術論文を中心に」(『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』51 二〇一五年三月)、同「韓国における『古事記』研究(四)——二〇一〇—二〇一一年の学術論文を中心に」(『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』52 二〇一六年三月)、同「韓国における『古事記』研究(五)——二〇一〇—二〇一三年の学術論文を中心に」(『甲南女子大学研究紀要 文学・文化編』53 二〇一七年三月)
- (4) RISSは韓国教育情報院によるデータベース。韓国内学術誌論文、海外学術誌論文、学位論文、単行本、学術誌などを検索できる。韓国内の学会及び大学附設の研究所が発行する学術誌の論文は約三五〇万件、学位論文は約一二四万件が収録されている。(収録数は二〇一三年十二月末基準) <http://www.riss.kr/index.do>
- (5) KSI韓国学術情報(Korean Studies Information, KSI)によるデータベース。韓国内一二〇余の学会及び研究所と著作権契約をしており、学会誌及び研究刊行物に掲載された約九〇万件的論文をPDF化し収録している。 <http://www.papersearch.net/>
- (6) Nummedia社が韓国最大の書店・教保書店とともに提供する学術情報データベース。約一七〇万件的論文、一八〇〇種の刊行物を収録(二〇一四年三月基準)。 <http://www.dpia.co.kr/>
- (7) 二〇一七年十二月十五日現在。漢字「古事記」もハングル表記「고사기」も同数の二七七件である。
- (8) 韓国の学術誌に掲載された日本人研究者の論文を含む。
- (9) 年表には日本人研究者による論文も掲載した。要旨は、原則として韓国人名の筆者による論文を選択し、私に翻訳し要約あるいは筆者による要旨を簡略化した。論文名等は適宜日本語に変えた。

“Kojiki” Studies in South Korea (6)
—— Academic papers from 2014 to 2015 ——

TANAKA Chiaki

Abstract: In this article, I introduce the study of “Kojiki” researches in South Korea. I will analyze the academic papers on “Kojiki” after 2000. South Korea has worked on its researches in full scale the 1980’s.

The similarity of the myths of Japan and South Korea, and the descriptions of the Korean Peninsula have been discussed there.

Key Words: Kojiki, Nihonshoki, South Korea

要旨：韓国においては、近代に入ってから『古事記』の研究が始められた。朝鮮半島に関する記述の存在、神話の類似性などが研究対象として関心を持つ理由であり、本格的に研究が進展してきたのは 1980 年代以降である。その研究方法は大きく次の二つに分けることができる。一つは日韓の神話を比較し、日本にいかにか文化的影響を与えたかを解明する研究、今一つは『古事記』『日本書紀』の特殊性をそれぞれのテキストに分離して探る研究である。方法の異なる両者を結び、且つ韓国の『古事記』研究の転機となった研究が、魯成煥『日本神話の研究』（報告社、2002 年 9 月）といえる。本稿ではこの『日本神話の研究』を転換点とみなし、刊行前夜にあたる 2000 年以降、どのような視覚から『古事記』が研究されているのかについて、韓国内における学術論文を紹介する。

キーワード：古事記、日本書紀、上代文献、韓国